

藻の産業利用に係る調査研究

(宍道湖・中海水環境保全・再生・賢明利用推進事業)

柳 昌之・石田健次

1. 研究目的

近年、宍道湖ではシオグサ（藻類）や沈水植物が増加し、シジミ漁の妨げになるだけでなく、シジミそのものへの影響が危惧されている。これらの大量発生の原因やシジミ漁業などへ与える影響を調査する。

2. 研究方法

(1) 藻類・沈水植物の分布

宍道湖は透明度が低く、湖中の沈水植物などの視認が困難で、調査は5～12月の間、毎月定点を定めず、車で移動しながら宍道湖岸と大橋川に併行する剣先川の湖面上で見られた藻類および沈水植物の分布状況を視認して回った。

(2) 分布量の調査

分布調査の結果、広範囲な分布が確認された宍道湖南岸の玉湯町玉湯漁港東側沖において調査船ワカサギ丸（0.8トン）を使用し、8月にライン調査を、8月と10月に坪刈り調査（50cm×50cm枠）を行った。ライン調査は3箇所で行い、沖合から岸方向へ航走して船上で調査員が左右約2m幅で見られた沈水植物群落を観察し、岸からの距離と群落規模を記録した。また坪刈り調査は各ライン1箇所ですべて潜水により50×50cmの方形枠を用いて採取し、実験室で全長や湿重量などを測定した。

3. 研究結果

(1) 藻類・沈水植物の分布状況

シオグサは宍道湖湖面では観察されなかったが、剣先川では6、7月に広範囲に視認され、8月以降見られなくなった。一方、沈水植物は7月以降に宍道湖南岸東側で見られ、次第に西側でも確認された。また、北岸では散見される程度で、斐伊川河口が位置する西岸では全く観察されなかった。9月には湖面上の分布域が狭小し始め、12月には湖面で観察されなくなった

(図1)。沈水植物が湖面上で広範囲に確認されたのは8月で、特に南岸の玉湯町沖では広範囲に分布した。

玉湯町沖の沈水植物は水深2m以浅でみられ、オオササエビモが多く占め、一部箇所ではホザキノフサモが混在した。オオササエビモは砂地に生育し、最大で全長1.8m、湿重量10.2gの個体が確認された。

個体の色彩は幼体が黄緑色、老個体が茶褐色で老個体が9月以降に多くみられた。9月30日の調査で幼体（全長21mm）が観察され、老個体が多く占める中で新旧の交代が行われていた。

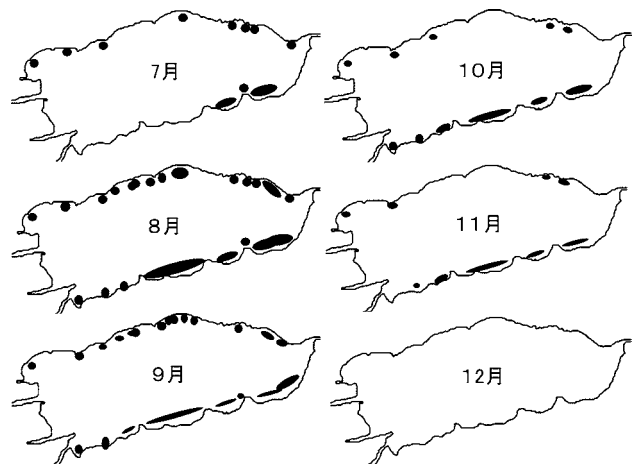


図1 宍道湖湖面で観察された沈水植物の分布

(2) 分布量

オオササエビモは、いずれのラインも距岸100～250mの沖合で群落が多く点在し、特に群落がよく発達したラインの湖面被度は32%に達した。また、湖底1㎡当たりの生育湿重量は8月に6.9Kg/㎡であったが、10月には3.4Kg/㎡に減少した。

4. 研究成果

● 調査で得られた結果は、宍道湖・中海水産資源維持再生事業検討会で発表した。